シリーズ・災害の教育訓練と防災交流　第７回

楽しい防災活動を生み出すパワー

市民防災・地域防災の在り方を変えた大西賞典さんの取組み

本誌特任記者　防災アドバイザー　加藤　孝一

防災の伝道師　防災・減災・大西さん

一市民の自由な発想が人を動かし、仲間とともに地域の防災活動を変えていく。そのような防災界のレジェンド、大西賞典（おおにししょうすけ）さんをご紹介したい。

自主的な地域の防災活動は長続きしないことが多い。人間は熱しやすく冷めやすい。

「いのちと財産を守る防災・減災活動」と言えば大義名分はいい。頭では「防災はいいことだ」と思っていても、だいたい防災は面白くもなんともない。「楽しい防災活動」なんて言いだそうものなら、「バカも休み休み言え」と言われそうだ。

ところが、その面白くもなんともない防災活動を、「防災の概念をぶっ潰せ」とばかりに「楽しく防災活動をやろう」と言い出し、「防災とは自分の大切な人を守ること」と明言した方がいる。「あいさつこそが本当の防災活動」「普段の生活に防災を取り入れよう」など数々のキャッチコピーとともにそのような考え方やアイデアを提言し、今日までの20数年間にわたって実践している。それが兵庫県加古川市在住の大西賞典さんだ。

兵庫県における加古川市の位置

「防災の伝道師」　大西賞典さん

自主防災活動と言えば組織に焦点を当てることが多く、その組織を牽引しているリーダーの存在が隠れてしまうことが多い。本稿では大西さんの発想と活動に焦点を当てたい。

なぜなら、一人の人間の存在が地域防災の在り方を大きく変え、しかも20数年後の今もなお、多彩な活動を継続している「防災界のレジェンド」なのだから。大西さんは、「防災の伝道師」の称号を総務省消防庁から授与された人物であり、防災研究家、防災活動家、そして防災アドバイザーでもある。しかも、防災と実業家の２足のわらじを履いている方だ。

大西さんは1962年（昭和37年）に兵庫県加古川市に生まれた。大阪工業大学卒業後は家業を引き継いだ。「防災の伝道師」と呼ばれる彼の本業は、加古川市内にある有限会社ごくらくや佛檀店（創業は慶応４年）の専務取締役である。実業家であると同時に、大西さん自身は仏具や漆器製作の工芸家でもあり、その作品は2015年（平成27年）に当時の皇太子殿下への献上品となっている。大西さんは、一般市民のための地域防災研究や活動のパイオニアであり、まさに防災界のカリスマ的な存在でもある。

だが近寄りがたい人ではない。安心してホンネの話ができるオープンで親しみやすい人柄なのだ。きっと大西さんは人が好きなのだろう。だからこそ人と人をつなぐ防災活動も苦にならず、それなりに楽しめるのだと思う。リーダー自身が楽しんでこそ、その喜びや楽しさが仲間や参加者

の方々にも伝わるものだ。

自主防災活動の難しさはどこでも同じ

世の中には建前と本音がある。その建前と本音のギャップが大きいのが地域防災の活動に違いない。趣旨には賛成だが「防災＝面白くもなんともない活動」だとすれば、そう長続きはしない。それに生産人口真っただ中の世代は自分自身の仕事があり、そう気楽に防災活動の時間が割けるわけでもない。一方、シルバー世代は時間があっても人を動かしイベントを盛り上げるほどのパワーがないことが多い。そのため、大震災や大水害などの大災害の後、各地で自主防災組織が作られても、いつの間にかその熱も冷めてしまい実際には機能しない有名無実の組織になってしまうことが多い。

もし、地域に根付き長年にわたり、効果的かつ自主的な防災活動を続けている組織があるとすれば、そこには一体どんな秘訣があるのだろうか。最初から結論めいて恐縮だが、筆者は大西さんたちの活動から、そこに６つのキーワードがあると感じている。

①牽引役のリーダーがいる　②人と人の関係や距離が近く心地よい（あいさつ運動など努力の成果として）　③楽しいのでつい参加したくなる　④防災が暮らしの中に溶けこんでいる　⑤苦楽を共にする仲間がいる　⑥共通の具体的でシンプルな目標がある

どの地域にもそこに住む人々にも、それなりに事情がありそれぞれの都合もある。特に人間関係が疎遠になりがちな住宅団地ともなれば、その傾向が一層強いことだろう。

「わずらわしい近所付き合いをしたくない。カギ一つで出入りできるマンション暮らしがいい」と考えている居住者が多いマンションの防災となれば、防災活動を始めることも、それをやり続けることも至難の業だ。それだけに、人の気持ちを理解し人を動かせるリーダーの存在や影響力が大きいことだろう。

加古川グリーンシティ全景

加古川グリーンシティと阪神・淡路大震災

大西さんは地域の防災リーダーとして、自主防災組織を立ち上げ多彩な防災活動を継続し注目を浴びてきた方だ。

その住宅団地は加古川グリーンシティと呼ばれている。そのマンション群について紹介したい。

兵庫県加古川市のＪＲ加古川駅から東へ徒歩10分のところに、大西さんの家族が住む加古川グリーンシティ（以下「グリーンシティ」という）がある。７棟14階建ての高層マンション群に約600世帯、約2,000人が居住している。

加古川市は、阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けた神戸まではＪＲ神戸線で約40分、大阪までも同じ路線で約１時間の距離にあることから、大阪や神戸など阪神間に通勤する人たちが多く居住している。その住宅団地の自主防災組織が「加古川グリーンシティ防災会」である。

1995年（平成７年）１月17日の阪神・淡路大震災で、加古川市内では死者２名、半壊家屋13棟、大西さんたちが住むグリーンシティでも建物、棟間の階段部分を結ぶ階段の接合部であるエクスパンションなどに被害が発生した。

グリーンシティには、1986年（昭和61年）の入居当時から管理組合内に自衛消防隊を含む防犯防災委員会が設置されていた。ところが同委員会は防災に主眼をおいた取組みではなかったために、この被害に対して十分に機能したわけではなかった。

加古川グリーンシティ全体案内図

加古川グリーンシティ防災会の設立とスローガン

この大震災以降に、全国的に町内会、自治会などで自主防災組織の結成が進められた。

グリーンシティでも、1998年（平成10年）に加古川市から補助金の助成による自主防災組織設立の打診があり、それまでの防犯防災委員会と自衛消防隊を統合し「加古川グリーンシティ防災会」（以下「防災会」という）と改めたという。防災会は平成10年６月に誕生し、創立メンバーの

一人が大西さんである。設立当初の活動では、阪神・淡路大震災以後にクローズアップされた「マンションの災害対策」について徹底的に取り組んだという。大西さんは発足当時から同会の会長をつとめており、「楽しく防災活動をやろう」を合言葉に、日常生活に防災を組み込んだ「生活防災」を実践してきた。

マンションの場合、ご近所付き合いが薄く、お互いの協力や支援を必要とする防災活動が根付かないことが最大の問題であった。仲間を増やし、防災活動に取り組むために考え出されたのが、前述の「楽しく防災活動をやろう」というスローガンであった。最初から大西さんたちの活動が順調だったわけではなく、このスローガンを掲げながら多彩なアイデアやキャンペーンを仕掛け、その結果として問題解決を図り、着々と防災の仲間づくりを進めてきた。

大西さんの存在なくして、他に例をみない多彩なアイデアやキャンペーンが、具現化して今日まで継続することはなかったことだろう。

いわば大西さんはアイデアマンであると同時にプランナー、メッセンジャーであり、まとめ役としてのリーダーシップを発揮し続けてきた。防災会の活動は「マンションの災害対策」の限定版ではなく、「防災とは何か、防災活動はどうあるべきか」という基本に立ち返り、その真の意味を自問自答するようになった。その結果、防災とは「自分の大切な人を守る」ために行うものという言葉に行きついたのだ。また、防災という言葉を前面に出さなくても、お互いにあいさつを交わし参加者が知らず知らずのうちに防災に関わっている状態、「防災を防災と語らずとも、防災の役割を果たすこと」を掲げ、日々の暮らしの中に防災を取り入れる「生活防災」を勧めている。

震災直後の神戸の街で出会った少女

なぜ、事業経営だけでも多忙なはずの大西さんが防災会に関わるようになったのか。大西さんは震災直後、神戸市内で忘れられない体験をした。大西さんいわく。「阪神・淡路大震災が発生してすぐの時に、仕事で神戸市東灘区を歩いていると『お父さん、お母さん』と家族を探す小さな女の子に出会った。そして『お父さん、お母さん』と言っている少女の悲痛な声があったにもかかわらず、その女の子に声を掛けてあげることができなかった。自宅に戻って自分の子どもの顔を見た時に、あの場であの子に声を掛ければよかった、と後悔し涙がとまらなかった」と言う。その大震災直後の苦い体験から、単なる傍観者としてではなく、主体的にグリーンシティの防災活動に関わるため防災会の会長も引き受けた。大西さんは、水道や電気、ガスが生きていくために必要なハード面のライフラインだとすれば、コミュニティはソフト面のライフラインだという。そのコミュニティで「防災、防災」と声高に唱えても人は逃げるばかりだ。それよりも普段の生活の中でお互いにあいさつを交わすことで、人と人が親近感を持ち相互につながることが防災の原点だと考えた。大西さんは「ご近所付き合いもなく、あいさつもないような街では防災活動は広がりません。まして被災時において、どちら様でしょうか？などと言っている間に次々と人の命が消えていきます。何か起こったときに素早い初動体制が組めるのはやはり日頃のあいさつから始まるのです」と言う。そこで、防災会が住民同士の結びつきを深めるために最初に取り組んだのが「あいさつ運動」を徹底したことであった。

どんな高い目標を掲げるよりも効果があり、エレベーターなどにポスターを貼るだけでも浸透していった。徐々にあいさつの輪が拡がり、いったん習慣化されると苦にはならなくなり、時間の経過とともにその力の大きさを実感するようになったという。たしかに、それまでは顔を見てもあいさつすらしたことのない者同士が、「おはようございます」などとあいさつを交わすことで気持ちが明るくなり、同じコミュニティの一員という意識も高まる効果もあった。人と人との良好な関係が自主防災活動の土台、土壌と考えたのは大正解であった。「防災はすべてあいさつからスタートする、そのことが人間関係を築き、いざというときに大きな備えになる」、震災直後の神戸市の路上で、両親を探す少女との出会い、それが大西さんの人生を変えた瞬間でもあった。この原体験がなければ「防災の伝道師」としての大西賞典さんは存在しなかったのかもしれない。

「防災とは」大事な人を助けるためのもの

自主防災の必要性は感じていても、その活動が長続きすることは少ない。そのことは前述のとおりであり、今もなお災害が起きるたびに同じようなことが全国各地で繰り返されている。

その理由について大西さんは「なぜ地域で防災をしなければならないか、という根本が理解されていない」とも感じていた。災害時に仕事優先で家族を残して家を出なければならない、となればその間に残された家族を守ってくれるのは地域の人たちだ。だから地域の人たちがいい関係であってほしい。お互いに地域の人たちと関わる必要がある。大西さんによれば「自分の大切な人を守ること」が地域活動の出発点であり、防災会で大切にしている理念だという。これほど具体的でシンプルな防災活動の目標はないかもしれない。

自分の大切な人を守るためには、まず自分自身が災害でケガなどしないようにしなければならない。また「自分の

大切な人」は家族や友人だけとは限らない。人とのつながりができると「他人とは思えない、身内も同然」ということもあるだろう。災害時にパッと心に浮かぶ人はそのような人たちかもしれない。

町内チャンピオンマップ(現：ちからこ部)と「一声かけて登録」

お互いに助け合うためには、各人が持っている知識や能力なりを発揮できればベストなことだろう。だが誰がどんなことができるか分からないものである。グリーンシティには約600世帯が暮らしており、その中にはさまざまな職業の方々がいる。大西さんは、彼らの持っている知識や技術、経験を災害時の対応に活かさない手はないと思った。そこから一つのユニークな試みとして始めたのが「町内チャンピオンマップ（現：ちからこ部）」構想だった。災害時に助けになりそうな知識技術や資格など、自分でできることがあれば何でも登録可能というものだ。

例えば一級建築士、電気工事士、医師、看護師、介護福祉士、危険物取扱者、救急救命士などの専門職はもちろん、力仕事ができる高校生や、子守や買い物を手伝える主婦など、登録したメンバーは250人になったという。当然、一定期間ごとに再登録を行い更新しているという。チャンピオンマップに登録したからと言って、その能力を必ず災害時に活用してもらうというものではない。あくまでもご本人の家族、仕事、地域という優先順位に従って活動してもらえばいいのである。大西さんは災害に備えた基盤づくりのための協力体制として捉えているのだ。チャンピオンマップが災害時に支援ができそうな方々の登録とすれば、もう一方では災害時に「一声」を掛けてほしい方々もいる。

高齢者や障害者、独居の方々であり、「一声かけて登録」では、災害時にいち早く声を掛けてほしいという方々を登録しているという。注目したいのは「一声かけて登録」のメンバーの多くがチャンピオンマップのメンバーでもあるという。大西さんは、防災への一歩を踏み出せる人は、強者にもなり得るということを知った。

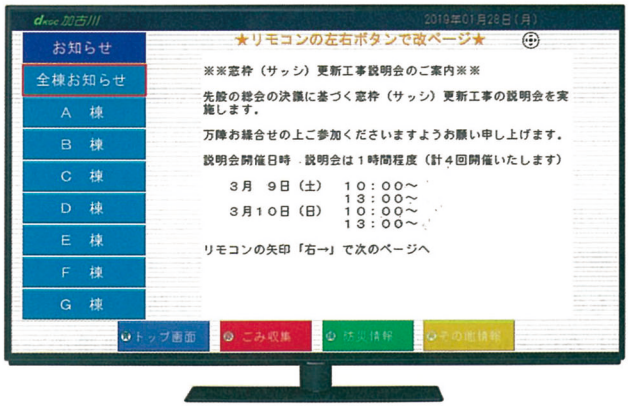
携帯用　命のライセンス

もしもノートシリーズ

防災会がこの20数年の間に実践してきたこと、今も実践していることはあまりに多くて語り尽くせないが、その一端をご紹介したい。人間は突然大災害に遭遇すると、仮に生き延びてもそれからどうしてよいか分からないものだという。そこで、災害発生から３日間にすべき行動を記した、常に携行できるカードサイズの「命のライセンス」を作製した。これは静岡県の「命のパスポート」をアレンジしたものだという。

防災インターネットのラジオ放送など、その活動を通じて国内外にまで情報発信を行っている。防災会の多彩なアイデアに満ちた活動を全部紹介したいところだが、その活動の一端に留めたい。実は大西さんは以前にも、「阪神・淡路大震災から15年」という本誌の特集記事に（「新しい防災活動」を合言葉に　―新しいスタイルの防災活動―）というタイトルで防災会の活動紹介を行っているからだ。（「近代消防」2010年１月号No.588）

また、防災会や彼が所長をつとめている地域防災研究所（後述）のホームページを通じて情報が入手可能である。ご興味のある方は、本稿末尾のＵＲＬを参考にしていただきたい。



コミュニティ放送ーグリーンチャンネルーテレビ付き

楽しくなければ防災じゃない　継続的な活動

防災会の重要課題は、「楽しく防災活動をやろう」「行政に頼らない」ことの２つである。

楽しくなければ防災の輪は広がらない。そこで「楽しく防災活動をやろう」の基本は、何があってもグリーンシティの住民全員が無事であってほしいということだ。

大西さんは「すべての方に防災意識を持ってもらうことが最大のポイントであった」と言う。そこで防災会では「防災だより」という広報誌や「グリーンネット」(マンション運営情報及び緊急情報システム)、「ニューメディアシステム」（テレビの空きチャンネルを利用したコミュニティ放

送)、「命のライセンス」(災害発生時の行動指針を示した冊子)、「もしもノートシリーズ」等を考え、普段から心得ておいてほしいことや最新の情報、緊急の情報などを常に提供できる設備とシステムを構築した。災害時に主に成人を対象とした「助けることができる人」、主に災害時要援護者を対象とした「助けてもらいたい人」の登録制度、「子どもたちとの合同の町内夜回り」、世代間交流を目的とした「餅つき大会」等、すべての世代が防災活動に参加できる行事を実践している。防災は「継続すること」が大きな力になることから、「楽しく防災活動をやろう」を基本に知恵を絞り工夫を凝らしているという。例えば、防災訓練では「炊き出し訓練」も併せて行われているが、単なる炊き出しでは面白くも楽しくもない。そこで1分30秒で2人前が焼きあがるイカ焼き機の炊き出し訓練も行っている。作ったイカ焼きは当然みんなで食べられるので、防災訓練に参加することが楽しくなる。その楽しみを覚えた子どもは大人になってからも防災会のイベントに参加するようになる。また、子どもたちを対象にスポーツパブリックビューイングなども行っている。もちろん、これだけ知恵を絞り創意工夫を重ねても、防災訓練には参加したくないという人もいれば、災害時の安否確認のために必要な「家族構成」は出せないという方々もいる。「その家族構成の状況が分からなければ、災害時に安否確認はしません」と伝えると、一気に参加者が増えたという。避難訓練では参加者には避難時に近くのインターホンを鳴らして声掛けをしてもらっているが、そうすることで、不参加として届けていた人がその場の流れで一緒に避難することもあるという。中には、組織的に何かを行おうとすると必ず不満を言う人たちもいるもので、その声に耳を傾けすぎると自主防災がうまく継続しないという側面もある。どう考えても600世帯の全住民に賛成を求めるのは不可能であり、防災に関わるのは自分次第なので一切、参加を強制することはないという。

大好評のイカ焼き機

大西さんの活動は、グリーンシティだけに留まらない。2007年(平成19年)から防災インターネットラジオ局を開設した。また、地元FM局「BAN-BANラジオ」コラボの番組「防災ショットバー」を2008年(平成20年)4月から担当している。

ラジオ番組「防災ショットバー」のスタジオで(右側が大西さん)

「防災とは自分の大切な人を守ること」というキャッチコピーは防災活動を始めた頃に生み出されたもので、他にもさまざまなキャッチコピーがある。「防災にはインセンティブが必要」「地域活動は余力でやるもの」さらには「助かりたいと思う人が助け合うシステムの構築」「防災の種を植えよう」など数多い。いずれも大西さんの創作である。

生活防災を形にする

防災会の活動では専門家にも協力や指導をお願いしている。「生活防災」という言葉は、京都大学防災研究所の矢守克也教授が生み出した言葉だが、一般市民にできる身近な防災対策として、普段の生活に防災を取り入れたものだ。大西さんたちのグループは矢守教授の指導と協力を得て、普段の暮らしがそのまま防災につながるライフスタイルを構築したとも言える。災害は非日常的なことではあるが、その被災の現場は家庭や職場あるいは子どもたちの学校、あるいは通勤、通学、買物の途中かもしれない。いずれにしてもその生活圏の中での出来事であり、とくに住まいが安全なものでなければならない。生活防災の中で、防災会が行っているユニークな活動の一つが「エレベーター緊急時応急手当訓練」だ。

前述のように、グリーンシティは14階建ての高層マンション群である。大地震の際、消防は消火や倒壊家屋からの人命救助等の対応に追われ、エレベーター閉じ込め等の救出には向かえないことが予想される。またエレベーター保守会社も公共施設などから優先的に確認作業を行うことか

ら、グリーンシティ独自に救出救護体制が必要と考え定期的に訓練を行っている。このような訓練を自主的に実践している住宅団地は稀有なことだろう。

また、災害時にはすべてのライフラインが途絶することが予想される。その中でも断水は非常に大きな影響があり生活用水の確保も困難となりがちだ。そのため防災会では、非常時の「水」を確保するためグリーンシティ内に防災井戸を２か所設置している。さらに子どもたちに「水の大切さ」を知ってもらうため、小さな親水公園も造ったという。この防災井戸の水は地下30メートルから汲み上げているもので、飲料水適応検査も定期的に行っているという。大西さんは災害事例から、被災住民として生活していくために必要な「生活水」は、どんなに少なく見積もっても１人１日50リットルは必要だとみている。

防災１号井戸

2004年（平成16年）の新潟県中越地震でも井戸にはほとんど被害がなく、生活に必要な水の確保ができたという報告もあるという。大西さんは、防災活動を継続するコツとして次のように述べている。「自分がやれることを自分のやれるスタイルでやる。自分のやれることを自分がやれる範囲でやる。そのスタイルと範囲が少しずつでも拡大すれば良い。そうすれば自分の生活文化となり長続きをする」と述べ「防災は余力でやるものだ」と言う。また、地域防災を広げるコツは「他人を信じて、頭を下げて、笑顔でいること」とも語る。

新型コロナウイルス感染症と最新情報の提供

昨年は、防災関係者にとってはコロナ禍で不本意な１年であったことだろう。防災会でも新型コロナウイルスの感染を避けるために、大勢の人たちが集合しての防災教育や訓練は行えなかった。三密を避けソーシャルディスタンスを確保した分散訓練などの方法もあったかもしれないが、防災会では感染防止対策のため「防災だより（毎月１回発行）」を通じて保健意識を高めることに全集中した。大西さんは、昨年の「防災だより」４月号と５月号に連続で、「新型コロナウイルスについて」という特集記事を執筆した。６月号では「手洗いでウイルスをやっつけろ！」と題して効果的な手洗い法を紹介した。７月号では新型コロナウイルス感染リスクと災害時の避難について」の特集記事を、10月号には「あなたは避難しますか？」、11月号では「避難って何だろう？」と避難に関する特集記事が続いた。さらに12月号では、その１年を総括するように、（今年１年の復習「居安思危」）という言葉を紹介している。人を怖がらせる「脅しの防災」を行っていたのではないかと反省を述べ、「人間は自分にとって都合の悪い情報は、無視する」という心理的特性について説明している。そこで大事なのは「このように行動すればこうなる」という自分の心が「理解を得るカタチ」となることで、学ぶ意欲が湧くという。「十分に納得し理解した上でなら、どんなことでも自ら判断して行動できること」を説いた。このような「理解」は平時のときに育んでおくことが重要で、何かが起こってからでは遅いのだという。大西さんは「中国古典」を引用して、「居安思危」、安きに居りて危うきを思うと説き、その言葉と同時に「思則有備」、思えば則ち備え有り、「有備無患」、備えあれば患いなし！　と続けている。新年（2021年）こそは「Withコロナ」で新しい学びからワクワクするようなグリーンシティにしていきましょうと結んでいる。

防災井戸と子ども向けの親水公園

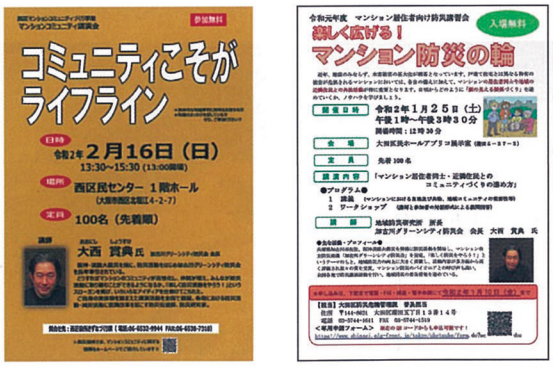
大西さんと地域防災研究所

2019年（令和元年）、大西さんは21年間つとめた防災会の会長を後任の方に託し特別顧問となった。新会長は、それまでサブリーダーとして大西さんを補佐してきた佃康雄さんである。この21年間、会長をつとめリーダーであると同時に「防災の何でも屋さん」であった大西さんには、地

域防災のノウハウやアイデアが何層にも蓄積されていた。大西さんのもとには、日本全国から地域防災に関する知識経験や情報を求めてくる方々が多かった。大西さんは、それまでに地層のように蓄積されたデータや知見をオープンにする目的で、会長を退任した年に「地域防災研究所」を設立した。防災会のメンバーとしての活動は本来、グリーンシティのための防災・減災活動であった。ところが、大西さんの活動が注目されると、日本全国の自治体や自主防災組織、消防・防災機関などから防災講演の依頼を受けるようになった。また大学や総務省消防庁などからも防災研究の委員として参画するよう要請されるなど、活動の幅が飛躍的に広がった。そのため、大西さんは防災会の会長を退任すると同時に、防災活動の仕分けと情報提供の場として「地域防災研究所」を設立し、所長としてその管理運営に当たるようになった。大西さんの活動について興味がある方は、地域防災研究所のホームページをクリックするだけで最新の詳細情報が入手できる仕掛けになっている。そのボリュームは膨大で、なぜ大西さんが「防災の伝道師」という称号を付与されたが理解できるというものだ。

その広範囲でこまめな活動から見えてくるのは、「大西さんだからできたこと」と納得できることだ。大西さんの場合、目の肥えた防災ジャーナリストさえも「さすが大西さん」と感服させるほどの実績があるという事実である。

地域防災に関心のある方々は、ぜひ地域防災研究所のホームページにアクセスしていただきたい。「百聞は一見に如かず」という言葉の意味を実感することだろう。



大西さん講演会のチラシ（左：大阪市西区、右：東京都大田区）

地域防災のリーダーとは

防災会はさまざまな賞を授与されている。第10回防災まちづくり大賞の総務大臣表彰を受け、さらに第15回において「消防庁長官賞」を受賞した。これは同一の団体としては前例のない２度目の栄誉ということになる。

大西さんの活動は一般的な自主防災組織の防災・減災の枠を超えている。筆者が感心したのは、彼はその道の専門家や参考になる方法があれば、そこから学び取り良いと思えば即実行することだ。だから単なる防災研究者ではなく防災・減災の活動家なのである。しかも、そのユニークなアイデアや知識経験を、囲い込むようなことは一切しない。

加古川市のシンポジウムでの大西さん（中央）

「これは私が、私たちが考えたことですから営業秘密です」などと小さなことは言わない。誰からか教えていただいたように、大西さんたちも聞きたい方々がいれば喜んで伝えている。

炊き出し訓練に欠かせないイカ焼き

だから大西さんのノウハウなどを入手することに何の障害もない。ご本人も喜んで協力し積極的に情報を提供してくれる。だが、それを実践するとなれば容易ではない。

それは大西さんたちのグループが「あいさつ運動」など地域の人と人との関係、距離感を近づけるために努力したからできたことなのだ。地域の協力的な人間関係なしに、単なるアイデアやノウハウだけで実践できるものではない。人間関係は防災活動の土壌のようなものだ。大西さんたちはその土壌の改良から始め、試行錯誤の中で効果的で楽しく防災活動を実践してきた。それも20数年の長期間に

わたっているので、防災・減災の知識やアイデアなどは「防災の地層」となっていることだろう。筆者の推測だか、大西さんは人が好きなのだろう。人と人とが交わりつながることが大好きな人間なのだ。それと同時に自分が取り組んでいることを好きになる。「好きこそものの上手なれ」は大西さんのような方のためにある言葉だろう。

好きだから何をやっても苦にならない、しかも人様のお役に立つことだ。そこに面白いアイデアや発想が加わる。人が好きだから人間の心理状態や機微にも長けている。

また、「楽しく防災をやろう」と言っている本人も楽しむことが必要だ。大西さん自らが笑顔で楽しむことで参加者にもその笑顔や楽しさが伝わることだろう。人と人との関係を近づける、「あいさつ運動」を防災活動の出発点にしたのは最上の方法だった。

ここで筆者なりの独断と偏見で防災のリーダー像をまとめてみたい。

①人が好き　②人の笑顔や喜ぶ姿を見たい　③人を動かすだけではなく自分も動く　④人柄もオープン、データや情報もオープン　⑤全員参加や全員賛成に固執しない　⑥良いと思えばやってみる(失敗も成功の基)　⑦人情味がある　⑧人生の無常や有限性を知っている(だからこそ頑張れる、優しくなれる)

もし、あなたが、このいくつかに該当しているならば地域の防災リーダーとしての資質は申し分ないことだろう。

参考までに大西さんの連絡先や、加古川グリーンシティ防災会、地域防災研究所のＵＲＬなどをご紹介してまとめとしたい。

大西賞典さん　Ｅメールアドレス
office@bo-sai.tokyo

大西さんの講演内容（PowerPointを公表）を知りたい場合や講演の依頼などは

地域防災研究所
https://bo-sai.tokyo/company.html

グリーンシティの防災・減災活動やその設立からの経緯などを知りたい場合は

加古川グリーンシティ防災会
http://www.greencity.sakura.ne.jp/bousai.html

1・17ひょうご安全の日宣言

阪神・淡路大震災から26年が経った
私たちは国内だけでなく　世界の多くの人たちにも
この震災の教訓を知ってもらいたい　活かしてもらいたい
そのように願って　伝え続けてきた

この震災に加えて　平成の時代に
北海道南西沖地震をはじめとして新潟県中越地震
東日本大震災そして熊本地震など
地震だけでも10を超える災害を経験し
多くの教訓を得ることができた

それらの教訓を活かした対策を一層進め
南海トラフ地震　首都直下型地震等の
国難災害の減災を目指そうとした
その矢先に　新型コロナウイルスによる
感染症拡大が発生した

クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号での
集団感染は衝撃であった
気がついてみると　様々な感染経路から全国的なひろがりとなり
同時にパンデミックとして　世界で猛威を振るうようになった
その心配の中で　7月に熊本県を中心に　豪雨災害が発生した

それは　感染症拡大の脅威下　複合災害となり
避難所の運営やボランティア活動も制約を受け
新たな課題や教訓が加わった
そして　パンデミックの次なる襲来が心配だ

忘れない　伝える　活かす　備える　阪神・淡路大震災の教訓を
震災の教訓は　すべての時代に通じる知恵だから

2021年1月17日
ひょうご安全の日推進県民会議